



ほつとするね
緑の府中

指導室 だより

第 52 号

編集・発行 府中市教育委員会学校教育部指導室
〒183-8703 府中市宮西町 2-24
電話 042-335-4063



11年頭所感II

「感性」を活かして

府中市教育委員会

教育委員 谷合 隆一

あけましておめでとうござい
ます。本年も平和で穏やかな一
年であることを心から願ってお
ります。

◆スピード違反では？

近年、インターネットの普及
により、世界中の情報を個人で
さえ瞬時に手に入れられ、文章
や写真などにおいては、まるで
隣にいる人に手渡ししているか
のごとく確実にやり取りができ
るようになりました。国際電話
ですら自分の携帯電話から、ど
の国にも直接かけられるように
なり、まさに「国際情報社会」
となり、本当に便利な世の中に
なりました。しかし実際にはど
うでしょう。遠くにいる人への
情報発信や書類等の伝達にかか
る時間が短くなったということ
だけなのではないでしょうか。
今まで人や物の移動速度は交
通機関の発達とともに速まって
来ましたが、データ化された情
報においては、ついに光の速度

にまで達しました。

そして、その速さにこそ価値
があるような社会になっていま
す。確かにビジネスとしての情
報速度は、その企業の存続にか
かわる問題かもしれません。

しかし、家庭や友達同士でも
その速度は必要なのでしょうが。

もし家族旅行で新幹線を利用
すれば、東京大阪間を3時間足
らずで移動でき、昔からみれば
まるで瞬間移動をしたかのよう
に目的地に着いてしまいます。

以前のように乗車時間がもう

少し長ければ、車窓から見える
民家の造りの違いや、田畑の作
物などに子どもたちが疑問を抱
いたり、お父さんの知ったかぶ
りも尊敬の的になるかも知れま
せん。また最近、友達からの
たわいもない内容の携帯メー
ルを受け取れば、返信の内容では
なく返信速度によって相手から
の評価が変わることもあります。

世の中の速度が速すぎて人間
は大切な「感性」を失ってしまっ
たのではないのでしょうか。

◆私の定義する感性とは

感性という言葉から、皆様は
どんなイメージが湧きますか？
美術や音楽などの芸術的な才能
ですか？手先の器用さや運動神
経などのセンスですか？なんだ
かとても優秀な人間にだけ備
わっているような印象もありま
すが、私が定義する感性とは「価
値のあるものに気づく感覚」です。

人間は自分を取り巻く自然や
社会環境に自ら働きかけたり、
あるいは環境から感じ取ったり
する経験・体験を通して、自分
を変えながら成長していきます。

「感性」とはその経験・体験
(相互作用)において主体であ
る個人が、五感(みる・きく・
におう・ふれる・あじわう)に
よる刺激の中から環境や対象の
価値や性質に気づいたり感じた
りして、選択的に識別する感覚
もしくは感覚にともなうて起こ
る感情であると考えます。

言い方を変えると、「感性」
とは「生きる力」の原動力、「自
分探しの旅」の指針であり、自

己発見・自己尊重・自己実現へ
の案内役です。もっとわかりや
すく言えば、「力の源」が感性
だと私は考えています。

◆国語・歴史をしっかりと

「日本が世界に誇れること
は？」と聞かれたら、私は日本
だけで使われる「日本語」を一
つにあげます。丁寧な言い方な
ど違った表現はこの国の言葉
でもあると思います。しかし、
謙譲語と尊敬語を使い分けたり、
男言葉や女言葉があるのも相手
のことを思う日本人特有の感性
なのだと思えます。話し言葉は
時代とともに移ろいゆくものか
も知れませんが、正確な日本語
を知っていて、使い分けができ
る日本人でいたいものです。

最近、日本食などで日本が世
界的にブームらしく、外国の
方々がとても日本のことを勉強
しているようです。日本でも世
界の共通語とされる英語(会話)
に対する関心は年々高まって
いて、習い始める年齢も低くなっ
てきました。

次代の担い手である子どもた
ちには、今後、国際社会で外国
の方々と世界を渡り歩く日本人
として、是非日本語や自国の歴
史についてしっかりと学び、そ
の感性を活かして戴きたいと
願っております。



特別支援教育の

充実を図る

府中市立南町小学校

校長 川内 清文

教育基本法、学校教育法の改正により、本年度より、法律に基づいた特別支援教育が本格実施した。改めて特別支援教育とは、「障がいのある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、幼児児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである。」(中央教育審議会「特別支援教育を推進するための制度の在り方について」(答申))

現在、特別支援学校(旧盲ろう養護学校)、特別支援学級、通級学級に在籍している児童生徒の他に、通常の学級に在籍し知的発達に遅れはないものの学習面や行動面で困難を示す、特別な教育支援を必要としている児童生徒は、全体の約6%程度いると言われている。この数値は、特別な教育支援を必要とし

ている児童生徒が通常の学級のどの学級にも在籍している可能性があることを示している。

今回の特別支援教育のポイントは、特別支援教育の対象をこれまでの特別支援学校、特別支援学級、通級学級に在籍している児童生徒のみならず、通常の学級に在籍する児童生徒に拡大した点である。

しかし、今回の特別支援教育は、単に対象を拡大したというだけではなく、一人一人の教育ニーズに応じた教育を推進していくという観点から、これまでの教育実践を見直す機会でもある。

特別支援教育の現状と課題を以下に述べる。

(1) 特別支援教育における「連携」

府中市では本格実施に先立ち昨年度から、各校に特別支援

コーディネーターが指名され、特別支援に関する校内委員会が設置された。これは、一人の教師だけで悩み、指導法等を工夫するのではなく、学校全体で児童生徒の行動を多面的に捉え、支援の在り方を話し合う委員会を置いて、チームとして連携していくものである。

また、府中市では巡回指導、巡回相談という学校外の専門家に直接学校に来てもらい、担任を支援してもらったり、子どもを直接指導してもらう制度もできた。これら学校内外の連携を強め、組織として対応していくことが特別支援教育を充実していくうえで大切である。

更に、特別支援学校・学級との連携、幼・小・中の一貫した支援の継続、関係機関との連携そして、保護者・地域との連携など、特別支援教育では、さまざまな「連携」がキーワードとなる。

(2) 個に応じた教育の推進

特別支援教育では、一人一人の教育的ニーズを把握し、その教育的ニーズに応じた適切な指導・支援をおこなうことが求められる。

個に応じた教育の推進は、これまで言われていたことであるが、一人一人の教育的ニーズを把握するために個に応じた教育を更にきめ細かく進めていく必要がある。

基本的な事柄としては特別支援教育においても、まず学級の子ども一人一人をしっかり見つめ、児童理解を深めることである。そして、特別な教育支援を必要とする児童を「困った子」問題児ではなく、「困っている子ども」支援を必要としている子どもとして捉え、きめ細かな支援をしていく。個別の指導計画や個別の教育支援計画は、計画的にきめ細かい支援をおこなうために必要なものの一つである。

こうした個別の支援を効果的におこなうためには、学級の中にそれぞれの子どもの居場所をつくってやること、一人一人は個性があり、それぞれの個性を互いに尊重し合うことが大切である。常日頃から指導しておくことが大切である。

〇共に生きる子を育てる

私たちは、社会の中でたくさんの人と人との関係の中で互いに支え合って生きている。それは、障がいのある子どもも、障がいのない子どもも変わらない。ただ、障がいのある子どもの中には、自ら人との関係を作り上げていくのが難しいため、人間関係の輪が広げられない子どもがいる。彼ら自身で中々広げられない輪は、周りの人たちの理解でその輪を広げてあげることが大切である。そのためには、障がいのある子どもだけ眼を向けるのではなく、その周りにいる子どもたちを育てていく必要がある。

特別支援教育ではこのように特別な教育支援を必要とする子どもへの対応と同時に、周りの子どもたちを育てて行くことが大切である。

このように、今回の特別支援教育のスタートをこれまでの教育実践をもう一度見直す機会として捉え、特別支援教育をより充実させ、「府中市学校教育プラン21」にある「障がいの有無にかかわらず、より一層一人一人が心豊かに、自分らしさを発揮して暮らせる社会を形成していく」子どもたちを育てていくことを大切にしていきたい。

府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

「人とのかかわりの中で、自分の思いを実現しようとする子」子どもと教師がつくる生活科・総合的な学習の時間を通して

府中市立四谷小学校
研究主任 橋本 美枝子

1 主題について

本主題は本校の児童の実態を吟味した中から生まれたもので「教師が育てたい」と願う「姿」を込めており、すべての教育活動を通して実現を図ることとした。研究する者の立場からは、どのように具現化できるかを考え、取り組むこととした。本主題には、次のような思いが込められている。

① 「人とのかかわりの中で思いを実現させる」とは、その過程に、自分一人の考えだけでは思いを実現させることができない多くの問題や課題が含まれているため、より納得できる方策を生み出そうとし、そこに子どもの実感を伴った学びが生まれる。(教師は、例え時間がかかって子どもが自分の力で生み出していくことを大切にします。)

② 子どもに実感の伴った学びが生まれるために、本校の総合的な学習の時間は、その学級で「実現させたいこと」を決め、子ども自身がその実現に向かう生活科も内容が決まっても、活動の展開は子どもの思いや願いがもとになっている。

③ 「子どもと教師がつくる」は、子どもが取り組む姿に教師がかかわり、共に思いの実現に向かうということである。(教師は、自分のかかわりを振り返り、問い直す姿勢を大切にします。)

2 評価

「子どもがその取り組みに寄せる思い」と「教師が願う子どもの姿」から、「その取り組みから子どもが学ぶであろうと考えられること」を予測し、それがどのように身に付いているかを子どもの姿から見取る。それは、



② 子どもの活動や内面を見通すための手だて：「子どもの思い」「教師が願う子どもの姿」を基に活動を構想した年間活動計画・単元の活動計画案・本時案を作成する。これらは子どもの取り組みに応じて修正・更新されるものと捉える。

ある「教師同士がお互いに考えを聞き合い、多面的に子どもの見方やかかわりについて捉えること」が、子どもの学びにつながる」ということが、見えてきた。今後の研究で取り組みたいことは、「効果的な記録の仕方」「子どもの豊かな学びにつながる素材の研究」「教師同士の学び合いが高まる研究部会のかかわり方」について実践を積んでいきたい。

3 研究の内容

本校が大切にしている子ども観「子どもは、自らもつ力を発揮し、主体的に実現させようとする」の立場に立っているためである。

① 「課題：子どもの学びの過程において、より適切なかかわりを生み出せる教師の力量を高める」

② 子どもの内面を見取るための手だて：子どもの活動を振り返り、学びの姿を継続的に記録し、記録をもとに教師同士が交流・検討する。

4 研究から

見えてきたこと

本研究を通して「子どもは、友だちとのかかわりの中で学びの質を高めていく」「題材を決める過程の中にも様々な学びが



府中市教育委員会研究協力校研究発表報告

「読み取り、考え、伝える力を高める指導法の工夫」
～国語科を中心として～

府中市立日新小学校
研究主任 伊東 由美

◆研究主題と設定の理由

本校の研究主題は「読み取り、考え、伝える力を高める指導法の工夫」～国語科を中心として～である。

平成17年に国語科の「話すことと聞くこと」を中心に研究に取り組んだ。その中で、児童の話し方や聞き方は上達したが、話す内容が充実していない、生き生きとした言葉になっていないなどの課題が明らかになった。そこで、伝える内容を充実させるには、まず児童に「自分の考えをもつ力」を付けること、「考える力」を高めることが必要であり、それらの力を国語の読み取りの学習を中心に研究することが高めたいと考えて、この研究主題を設定した。

◆研究の概略

まず、この研究を通して高めたい児童の力を共通理解することが必要と考え、日新小としての「読み取る力」「考える力」

「伝える力」を定義付けることから始めた。何度かの話し合いや授業を通して、「考える力」を想像的思考力と論理的思考力とに整理し、それらを学習指導要領国語科の「読むこと」「話すこと・聞くこと」の中から具体的に捉えていった。

さらに、学年に応じてそれぞれの授業で「児童に付けたい力」を明確にし、その力を付けるための手だてを考えていくことにした。

児童の実態把握と共に丁寧な教材研究を土台にし、指導計画、学習形態、教材・教具、学習環境、評価のそれぞれから指導法



の工夫を重ねていった。

◆研究の成果

このような研究の結果、児童の考える力を高めるために、「音読」や「ワークシートの活用」・「サイドラインの工夫」・「ノート」の活用・「学習形態の工夫」などが成果として挙げられた。

授業の中では、自分の考えを自信をもって発表する児童が増え、話し合いの内容の充実につながり、学習に意欲的に取り組むようになってきている。

「考える力」を高めるための読み取りの学習に力を入れてきた

が、結果として、児童が話を聞く時にも集中している様子が見えるようになった。学習全般に落ち着きと積極性が表れている。

また、この研究を通して、私たち教員も変わってきた。丁寧な教材研究の上に、付けたい力を明確に意識して授業を組み立てることで児童が変わってくることを目の当たりにして、手応えを感じている。互いに多くの授業を見合い、協議を重ねる中で、授業を見る視点が確かなものになってきた。

特段新しいことではないが、丁寧な教材研究の大切さと互いに授業を見合うことの大切さを改めて意識する研究になった。

◆研究発表

研究発表は、「パネルディスカッション的手法で」という副題を付けて行った。

コーディネーターに、これまで本研究の講師としてご指導いただいた東京家政大学准教授：安達知子先生に入っ



ただき、パネラーとして研究推進委員長と各分科会からの代表が席に着き、コーディネーターからの問いかけに答える形で発表した。

どのような言葉で話すことにより、来てくださった皆さんに研究の内容を伝えられるかと試行錯誤で行った方法だったが、私たち自身が自分たちの研究を振り返ることにつながった。

話し言葉で短くまとめる作業は、この研究で大切だった点や重要な点を抜き出し、一番伝えたいことが伝わるように話すという点であり、それはまさにこの研究にそのままつながるのであった。

平成19年度文部科学省全国学校体育優良校表彰

「豊かなかわりの中で、主体的に運動に取り組み、健康な生活を営む子ども」の育成
～「全国学校体育優良校表彰」を受賞して～

府中市立白糸台小学校 校長 小澤 誠一

本校は、平成17年度から「知・徳・体」の具現化に視点を当てた研究に取り組み、昨年度は東京都小学校体育研究会の多摩地区研究発表会を行った。

その実績が認められ、この度文部科学省並びに財団法人日本体育研究連合会主催の『平成19年度全国学校体育優良校表彰』を受賞した。

ここに、その研究の一端を紹介する。

1 研究の意図

体育科教育の究極の目標は、「楽しく明るい生活を営む態度を育てること」である。そのため

には、生涯にわたって運動やスポーツを豊かに実践するための資質や能力、健康で安全な生活を営む実践力を育てることが必要である。

しかし、本校の子どもたちの実態をとらえてみると、運動が

好きで、積極的に体を動かす子どもと運動があまり好きでない子どもとの二極化の現象がうかがえた。

これを解決するためには、全ての子どもが仲間と豊かにかかわりながら汗をにじませ、進んで運動に取り組む体育学習が求められた。そして、体を動かすことの大切さや自分自身の健康について考えさせることの重要性も含め、よりよき子どもたちの姿を目指すため、体育科の運動領域と保健領域の両面から指導・研究を進めることとした。

2 研究の実践内容

○一年 ゲーム・鬼遊び

「ミニーお宝ゲット大作戦」

複雑なルールは理解が難しく、学習意欲を阻害することになるため、始めは単純なルールにして、やさしい鬼遊びを十分楽しませた。そして次に、その楽し



さの体験をもとに、更に楽しめるルールの工夫を教師と話し合いながらできるようにした。その結果、どの子にも意欲的に運動に取り組む姿が見られた。

○二年 ゲーム「タグゴール」
チームでの「教え合い・学び合い」の場を多く取り入れた。このことがチームの所属感を育て、運動意欲の向上につながった。また、子どものよさに関して、教師が気づいた点を提示し、フィードバックさせたことも効果的であった。

○三年 保健「毎日の生活と健康」
健康な生活を送るきっかけとして「チャレンジ週間」を設定した。養護教諭や教職員、保護

者へのインタビューを取り入れた体験的な活動を通じ、実践へとつなげた。また、保護者に授業に参加してもらうことを通じて自分が家族から大切にされているということ子どもたちに伝えることもできた。

○四年 ゲーム「タグゲーム」
どのようなかわり方をすれば豊かな人間関係をはぐくむことができるのか、「かわりカード」として提示した。また、授業を通して見られた子どもたちの「よい声かけ」や「よい動き」も提示した。

3 研究の成果

○体育の学習において技能だけでなく、友だちとのかわりの中で、達成感を感じている子どもが増えた。

○保健領域では、保護者の参加やインタビューを取り入れたことで、家庭との連携の大切さが確認できた。

子どもによさ、よい動きを引き出すための指導を今後も更に研究していく。



平成19年度文部科学省全国学校体育優良校表彰

文部科学省及び財団法人日本体育研究連合会による

全国学校体育優良校を受賞して

府中市立府中第二中学校 教諭 河野 龍

◆府中市の特色

府中市には他の地域にはない
トップチームを有する企業が
いくつもある。最近では、企業
積極的に社会・文化事業を行い、
総合的な学習の時間を始め、学
校と連携するケースが増えてき
ている。このことに着目し、企
業の力を学校教育に活かす方法
について考えてきた。

まず、企業と連携を図ってい
くために、府中市内の中学校に
アンケートをとった。ここでは、
『技術指導に不安がある』より
専門性を高めたい』などの意見
が出された。

そこで、学校と企業双方の考
えや意見を交換できる場が必要
ではないかと考え、意見交換会
を行うことにした。様々な意見
が出され、府中第二中学校では、
生徒のために企業との連携を通
じて授業や部活動を行う方法を
考えた。

こうして生徒たちに対して授
業や部活への意欲を高め、また、

より有効な指導の在り方を探る
ために、市内の五つの企業（東
芝府中、サントリー、NEC、
トヨタ、東京ガス（FC東京）
と連携を図り、中学校における
体育活動の活性化の研究は始
まったわけである。

◆企業と学校との連携へ

最初は学校に来校し実技指導
をしていたくまでに多くの課
題があった。これがうまくいっ
たのは、府中市教育委員会体育
課の協力があつたことが欠かせ
ない。そのお陰で企業に、社会
への貢献を理念に挙げ、できる
限りの協力を約束していただい
た。

例えば、二年選択の保健体育
の女子の授業では、サントリー
ラグビー部のコーチの方を講師
に招いた。基本的なルールや練
習方法などを教えていただいた
のが、教員にとってもありがた
かった。

今年度は、複数の選択授業の
中でタグラグビーに取り組み、



また講師としてもご指導いただ
いた。

さらに、部活動の方でも連携
を深めていけないかと考えた。
数年前からバレーボール部では
FC東京のご協力で、クリニック
を開催している。

その他、夏休み前には、サン
トリーの帯同トレーナーの方に
来ていただき、熱中症や水分の
補給の仕方、簡単な救急法（R
ICE処置）についても教えて
いただくことができた。

今年度は、FC東京の下部組
織のコーチにサッカー部の指導
をお願いすることができた。

◆今後の展望

生徒にとってまず大きな成果
があったのは、トッププレイ
ヤーと直接触れ合うことで、ま

ますますスポーツに対する意欲
や関心が増したことである。

また、専門のトレーナーか
ら正しい知識や技術を学ぶこ
とにより傷害や事故の防止及
び、万一事故が起きたときに
素早く対処することができ
るようになった。また、受傷後
の早期回復、競技復帰に役立
てることができた。

教員にとっても、専門的な
知識や技術を得られるととも
に、正確で効果的な方法を知
ることができ、特に初めて
部活を指導する者にとっては、
基本的な指導方法を知ることが
でき、自信をもって指導できる
という成果を得ることができた。

学校にとっては、地域の方々
や地元企業との連携を通じて、
「開かれた学校づくり」に役立
てることが出来たと思う。

しかし、課題も残された。今
までの連携事業の中から、継続
していく内容や対象、時期をど
のように吟味していくかは難し
い問題である。事実、本年度は
夏休み前は日程調整がうまくい
かず開催ができなかった。また、
誰が企業連携の窓口になってい
くのかも考えていかなければな
い点である。

◆まとめ

昨年度より、府中市教育委員
会の研究協力校として全教科の

授業改善について研究を行って
いる。この度は、その中でも体
育分野で全国表彰を受けられた
ことは、生徒に対しての成果を
評価していただけたものだと思
っている。

また、今回の研究では、多く
の企業の方々並びに市、地域の
方々のご尽力を賜り、充実した
研究を進めることができた。こ
うした協力がなければ、この研
究の成果はなかったと考えてい
る。ここで、お礼を申し上げた
いと思えます。

今後も研究を進めていき、生
徒たちの成長の助力になればと
考えている。さらなる発展のた
めにも、皆様のお力を貸してい
ただけたらと考えています。



わが校の特色ある教育 NO. 18

「キャリア教育の視点に立った進路指導」

～職場体験 5 日間を終えて～

府中市立府中第六中学校

進路指導主幹 桐川 勲

☆キャリア教育への試み

本校では今年度、特別委員会を立ち上げ、キャリア教育の推進に取り組んでいる。その概要は次の通りである

(1) 六中キャリア教育の全体計画を構想する

キャリア教育の目的は、「職場体験を行う」ことではなく、「望ましい職業観・勤労観を身に付けさせると共に、自己を理解し主体的に進路を選択する能力を育てる」と捉え、本校に適したプラン作りを進めている。

① 一年生で進路に関する活動として「自己理解」を重点に「生

府中第六中学校キャリア教育全体概要図

Table with 4 columns: 1年 自己理解, 2年 自己探求, 3年 自己実現, and 各教科/特別活動/道徳/その他の活動. Includes sub-tables for '本校の教育目標' and '本校キャリア教育テーマ'.

き方を見つめる」学習に取り組んだ。
② 二年生では「自己探求」を重点に「ふれあいを広げる」学習を展開中である。
③ 三年生では「自己実現」を重点に「夢をつなげる」学習活動を計画している。
(2) 職場体験五日間実施
今年度「職場体験」(5日間)を下記の通り実施した。



5日間だからこそ得られる「職場を愛する気持ち」「人とのふれ合いの大切さ」「仕事に対する責任感」... 花が咲いていた。「生きる力」を身

アンケート集計結果

Survey results table with 4 columns: 項目 (Item), 生徒 (Students), 保護者 (Parents/Guardians). Rows include questions about enjoyment, learning, and future plans.

前年度まで2日間行っていた体験を土台とし、約1年間かけて準備をした。
日時 平成19年9月24日(月)～28日(金)
体験先 公共施設・近隣企業・幼稚園・個人事業所等53カ所

に付けるためには、生徒たちの可能性を信じて外に出してやることも大切だと痛感した。
(3) キャリア教育と学力向上
生徒が3年間キャリア教育を積み上げることで目的意識が高まる。生徒一人一人が具体的に生き方を学び将来を考えることは、学習意欲の向上にもつながり、結果的には学力向上へと結びついていくと確信する。

府中市教育委員会研究協力校
研究発表会案内 (本発表のみ)

- ◆府中第一小学校 1月25日
○主題「感じ・考え・創造する子の育成」(全教科)
- 「ICTの活用と授業デザイン」独立行政法人メディア教育開発センター教授 中川一史氏
- ◆府中第二中学校 1月31日
○主題「連携を通じた『学校力』の向上について」(全教科他)
- 講演「新しい教育課程の方向性」と思考力の育成」文部科学省教科調査官 富山哲也氏
- ◆南白糸台小学校 2月7日
○主題「豊かな関わりの中で、たくましく生きる児童の育成」(道徳)
- 講演「学習指導要領の改訂とこれからの道徳教育」文部科学省教科調査官 永田繁雄氏
- ◆道徳授業地区公開講座案内
- ◆1月20日(日) 府中第九小学校 8時45分
- ◆1月22日(火) 府中第四小学校 13時20分
- ◆1月29日(火) 新町小学校 13時45分
- ◆2月7日(木) 南白糸台小学校 13時30分
- ◆2月12日(火) 若松小学校 13時45分
- ◆2月15日(金) 南町小学校 10時45分
- ◆2月18日(月) 住吉小学校 13時20分
- ◆2月19日(火) 府中第六小学校 8時50分
- ◆2月20日(水) 日新小学校 13時45分
- ◆2月21日(木) 府中第三小学校 8時35分
府中第十小学校 13時30分

1月研修会・委員会予定	研修会・委員会等		会場	研修内容等
	7	月	進路指導主任会	教育センター
8	火	教育課題検討委員会	教育センター	全体会 (報告書作成に向けて)
11	金	就学指導協議会	教育センター	第5回 A・B部会
17	木	道徳教育推進委員会	日新小学校	授業研究
18	金	ICT活用推進委員会	府中第六小学校	授業研究・全体会
18	金	特別支援教育推進委員会	教育センター	全体会
21	月	生活指導主任会	教育センター	全体会 (連絡・検討事項) 小・中分科会
21	月	特別支援学級代表者会	都立調布養護学校	担任研修会
24	木	教務主任会	教育センター	全体会 (教育課程届説明会)
28	月	校内研修担当者研修会	教育センター	全体会
29	火	初任者等研修会	府中第二中学校	初任者による研究授業・協議 (特別支援学級)



昨年「体育の日」の朝刊に、「子供の体力 危機的レベル」という見出しを見付けた。文部科学省が公表した「2006年度体力・運動能力調査」についての記事である。

これまで、小学生の運動能力は「昭和60年頃から現在まで低下傾向が続いている」とさわれていた。しかし、今回の調査結果から、各種目の記録が20年前をピークに低下し始め、ここ10年間は低水準のまま横ばいの状態が続いている現状から、同省は「これ以上、下がりようのない危機的な水準ではないか」と指摘している。

児童・生徒の体力向上を目指して

中央教育審議会の「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」によると、体育・保健体育科の課題として、運動する子どもとそうでない子どもの二極化や体力の低下傾向が依然として深刻であること、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成が十分に図られていないこと等が指摘されている。

体力向上は、極めて重要な教育課題の一つである。さて、本市の児童・生徒の体力・運動能力の実態はどうであろうか。体力向上モデル校の児童・生徒(約5000名)の調査結果によると、反復横跳び(敏しょう性)、20mシャトルラン・持久走(持久力)、立ち幅跳び(跳力)、ソフトボール投げ(投力)等に課題があることが明らかになった。

なるほど、真っすぐに走れなかったり、転んだ時に手を着くことができずに顔をけがしたり、走り幅跳びの助走で、踏み切りの前に失速してしまったり・・・日常の子どもの運動する姿から、その例はいくつでも挙げる事ができる。

一人一人の児童・生徒が自らの体力や健康状態を知り、自らの生活に根ざした体力づくり、健康づくりの効果的に取り組むことができるようになることを目指して、市内全校、全児童・全生徒での新体力テストの実施に向け、準備を進めている。

事務局の窓
府中だからこそその美術教育を
府中市美術館
教育普及担当主査 武居利史

府中市美術館は、優れた美術作品の収集・保存・展示という美術館本来の活動とともに、市民の美意識と才能を育むための教育普及活動にも力を入れている。

中でも、学校教育との連携は、文化・芸術の面で世界にはばたく府中っ子を育てる上で大切な柱として、図工・美術科の教員と力を合わせて進めている。

特に、鑑賞教育の重要性から、全国的にも美術館と学校との連携が注目されている。当館は、平成13年度から市立小中学校の美術鑑賞教室に取り組み、今日すべての児童生徒が美術館で本物の作品にふれる機会を提供している。このような広がりも継続性をもつ鑑賞教育の実践は全国的にみても高い水準にある。

さらに、府中市立小中学校連合図工・美術展などの作品発表、教員との共同ワークショップ、及び教員自身のための研修の場としても活用されている。鑑賞教育にとどまらず、美術館と学校の多様な連携を、これからもさらに進めていきたい。